

研究機関とメディア連携による 防災教育推進モデルの開発と実践

NHK 大津放送局アナウンサー

立命館大学 総合科学技術研究機構 客員研究員

(防災フロンティア研究センター)

人と防災未来センターリサーチフェロー

大山武人

去年7月 西日本豪雨

「**“早めの避難”**が
様々な形で呼びかけられたが、
必ずしも
**避難行動に結びつけることは
できなかった**」

平成30年7月豪雨災害における避難行動に関する考察

—岡山県倉敷市真備町の住民意識調査より— (阪本・松多・廣井2018)

Q 地域のハザードマップを知っていましたか？ (n = 100)

- ・内容を理解していた 24%
- ・見たことはある
(内容を理解するには至っていなかった) 51%
- ・知らなかった 25%

→ 「ハザードマップを配布するだけでなく、それを理解し、避難行動に結びつけるための取り組みが求められる」と指摘

ハザードマップを見ることは、
自分の住む地域の災害リスクを理解し
どのタイミングでどこに避難するかを考える第一歩

しかし

テレビ等で「ハザードマップを見てください」と呼びかけても
どれだけの人がハザードマップを手にするのだろうか？

そこで

視聴者に平常時からハザードマップを見てもらうとともに
豪雨災害が滋賀でも起こりうるという「わがこと感」を持って
備えてもらうための新たなアプローチを試みることに

「水害が少ない地域」で災害リスクを伝える

平成29年水害被害額（確報値） 国土交通省

滋賀県 33億7000万円（33位）

※平成25年9月16日 運用開始後初めて大雨特別警報発表

	水害被害額（滋賀県）	全国順位
2014年	1,306	33
2013年	15,133	8
2012年	1,161	34
2011年	459	44
2010年	155	44
2009年	-	
2008年	660	30
2006年	434	43

（単位 百万円）

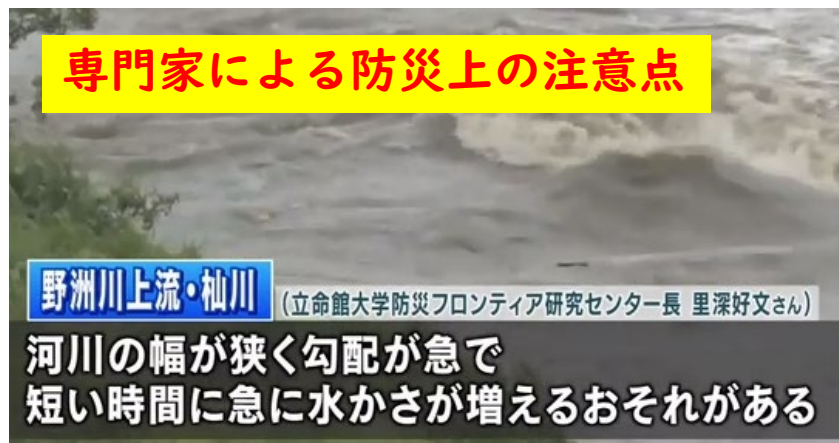
実は・・・滋賀県内でも様々な水害リスク！



地域の災害リスクを地域の視聴者に伝え
「滋賀でも水害が起こりうる」ことを
伝えるための取り組みが求められている

地域メディアが持つ資産と、研究機関の知見を活した 「滋賀でも水害が起こりうる」ことを伝えるコンテンツ 開発

シリーズ「河川防災ファイル」



滋賀県防災情報マップのベースに
グーグルマップを使用することで
身近な地名やランドマークを表示

「研究機関とメディア連携による 防災教育推進モデル」

【協働】研究機関（立命館大学防災フロンティア研究センター）・NHK

コンテンツのリクエスト等
フィードバック

【放送・毎週木曜日】
「おうみ発630」
防災コーナーを放送

【放送後】
番組ホームページで動画配信
ネットにつながるPC等で
いつでも視聴可能

【防災教育の材料として活用】

【地域】
防災士会
自主防災組織等

【教育】
各学校防災担当教諭

【行政】
市町防災担当者

【研修・勉強会・出前講座・授業等】

地域住民

児童・生徒・学生

地域住民

防災コーナーを研究機関とメディアが協働して
制作・放送するだけでなく
放送後、番組ホームページでネット配信し
地域の防災教育の場での活用や
そこからのフィードバックまでを想定

「研究機関とメディア連携による 防災教育推進モデルの開発と実践」

防災教育では
パワーポイント
などでパソコン
を活用

地域防災への
影響力

地域の防災教育の現場 = 地域の「防災リーダー」育成の場

【地域】
防災士会
自主防災組織等

【教育】
学校 防災担当教諭

【行政】
市町防災担当者

【研修・勉強会・出前講座・授業等】

地域住民

児童・生徒・学生

地域住民

F: 地域コミュニティ避難促進プロジェクト

～地域コミュニティの防災力の強化と情報弱者へのアプローチ～

登録型のプッシュ型メールシステムによる高齢者避難支援「ふるさとプッシュ」の提供、
「避難インフルエンサー(災害時避難行動リーダー)」への情報提供支援

「避難インフルエンサー」

災害情報を正しく理解し、発信できる人・信頼される人で、
災害時にはリーダーとなって
高齢者を含む周囲の人たちに情報を拡散させることで、
避難に対して大きな影響を与える人。

防災コーナーの動画の活用は
地域防災に影響力のある人たちへのサポートになる
と考えられる

6月8日 市民向け講座（東近江市）

防災担当者

「先ほどの動画のように道路が水が浸かっている時は無理に避難先に向かうとかえって危険。自宅にとどまった方がよいケースも」

「堤防が決壊していた、先ほどの動画のような状態が、警戒レベル5のイメージです。」

動画の内容に言及しながら解説

防災担当者

「言葉・固定の図だけでは、イメージしていただくことが難しいので、あぁいった動画を使わせていただくことで、自身も含めてなんですけれども、実際の災害の状況とか、自分の置かれる状況というのをイメージしていただきやすいのかなということで、動画を使わせていただいています。」

受講者（高校生）

「講座の前に水害の映像を見ることによって、どういう災害が起こるのかとか、考えがいっぱい膨らむと思いました」

6月23日 彦根市での防災の勉強会

彦根市野瀬町

犬上川のすぐ近くに位置・犬上川が地域の防災上の課題

河川防災ファイル「犬上川」を視聴

犬上川の堤防が破損した時の映像
専門家による防災上の注意点
浸水想定ハザードマップ

講師（日本防災士会防災士）

「動画でイメージがわくわけですよ。
イメージというのはものすごく大事で、
そして講義に入るのが大事なのではないかと。」

受講者（住民）

「すぐその身近な川が氾濫したらどうなるかということ
具体的に見ることができてよかったです。
自分の家がどのへんにあるのかなということ
思わず考えてしまいました。」

6月8日「東近江市防災リーダー養成講座」（東近江市・災危機管理課）
 6月23日彦根市野瀬町での住民による防災の勉強会
 日本防災士会滋賀県支部・防災士

n=43	そう思う	ややそう思う	あまりそう 思わない	全く思わない 分からない
自分の身の回りに災害が起こるかもしれないと感じた。	77%	21%	2%	回答なし
防災コーナーの動画を見たので、防災講座を、より興味を持って聴くことができた。	70%	26%	5%	
防災コーナーの動画を見たので、防災講座をより深く理解できた。	56%	37%	7%	
一般的な防災の動画とは別に、滋賀に密着した、防災についての動画が必要だと思った。	77%	19%	2%	

「研究機関とメディア連携による防災教育推進モデルの開発と実践」 考察と今後の展望

- ① 「自分の身の回りに災害が起こるかもしれない」という「わがこと感」や、動画を見た後に行われた講座等への興味・関心について、動画の視聴による効果があったと推測される。
- ② 自分の住む地域についての防災の動画に一定の需要がある。
- ③ フィードバックで寄せられた要望を、今後どのようにラインナップに反映させることができるのかが課題である。
- ④ 研究機関とメディアはもちろん、地域防災に関わる人たちと広く協働し、地域の防災教育を推進する一つの「モデル」として、検証を重ねながら、開発・実践を進めていく。